

# Library Information No. 16

2005年3月

## 目次

より良い外大図書館への道	1
図書館で情報検索ーペルシア語の場合	3
今様・知的生産の技術ー検索のすすめ	6
「伊地智文庫」に寄せて	9
図書館利用アンケートの結果について	10
寄贈圖書の紹介	20
「図書館ガイドンス」,「書庫内資料検索ガイドンス」,「電子ジャーナル講習会」に参加しよう	20
附属図書館Q & A	21
AVライブラリーQ & A	23
平成16年度貸出ベスト30	24

### より良い外大図書館への道

附属図書館長 橋本 勝



この3月1日付で附属図書館長を拝命致しました。先ずは、皆様に謹んで御挨拶申し上げます。

図書館は、大学の言わば心臓部にも相当し重要な役割を担っていることは、周知の如くです。教職員や学生が論文、レポートを執筆したり何かの調べものをしたり広く読書する時に常々、図書館を利用します。私が学生の頃は勿論、コンピュータの端末機などは全くない時代であり書物、文献資料を検索する時は木製のカードボックスのカードを繰り著者名別、書名別により探し求めて図書を利用していたものです。大学院生時代は、書庫に入って書物の海を探索して思わぬ書物に出会い、そこでそのまま留まり時間を忘れて読みふけることもありました。古い時代のアナログ的な本好きにとってこれは、何時になっても心が満たされた気分になり正に読書の醍醐味と言えます。

併し、今やインターネット、電子化、ペーパーレス化の時代となり図書館のあり方も急激に変化してきました。本学図書館も例外ではありません。将来的には電子図書館化の方向へ進んでいくことでしょう。

現在、本学図書館には約60万冊の図書及び4,000種類以上の雑誌が所蔵されております。大いに有効に利用して頂きたいと思えます。図書館は、情報提供源として非常に重要な役割を持っていますが、それを支えるのは地味で根気を要するライブラリアンの仕事によっています。外大図書館と云う特性から図書の収集、整理の面でも多言語の知識を有する図書館員が求められます。現実には法人化により欠員不補充と云うことからか館員の仕事量は倍増していると言ってもよいでしょう。館員の補充、増員は現在の本学図書館の切実な問題の一つであります。

国立大学が昨年4月より一斉に法人化され本

学も国立大学法人大阪外国語大学となりました。そこで法人化後の本学図書館の取組み、方針について紹介しておきます。中期計画としては以下のことを定めています。現在、平成16年度の項目内容は、ほぼ実施されました。

#### ○国立大学法人大阪外国語大学中期計画 (附属図書館に係る部分)

附属図書館施設の見直しにより、閲覧・開架スペースの拡大や学習機能の強化を目指す。研究資料の集中配置、開館時間帯の見直しを進め、利用者教育、情報リテラシー教育の強化を図る。

#### ○国立大学法人大阪外国語大学年度計画 (附属図書館に係る部分)

##### [平成16年度]

1 附属図書館施設の見直しで、閲覧・開架スペースの拡大や学習機能の強化を目指して、研究資料の集中配置、開館時間帯の見直しを進め、利用者教育、情報リテラシー教育の強化を図るため、附属図書館において、次のとおり視聴覚施設を移転させ、設備の一部を更新する。

マルチメディア教室(2室)の設備を更新する(情報処理センター)。

AVライブラリー及びマルチメディア教室(2室)等を総合研究棟へ移転させる(情報処理センター)。

同時通訳演習室及び通訳ブースの設備の更新計画を作成する(情報処理センター)。

2 図書館施設の全面的改修を行うための予算を要求する。

3 利用者へのサービス向上、利用者教育を強化し、情報リテラシー教育の基礎固めを行うため、次の諸策を行う。

利用者のニーズを把握するため、教職員及び学生に対してアンケート調査を実施し、その結果を報告書にまとめる。

新入生に対する図書館オリエンテーション、図書館ツアー、開架書庫利用ガイダンス、電子ジャーナル利用講習会を開催する。

年間の開館日程を見直し、開館日数の増加を図る。

利用者のための情報リテラシー教育の実施について、教育推進室と連携して検討し、その実施プランを作成する。

##### [平成17年度]

1. 附属図書館において、施設全面改修までの間、現有施設の有効活用、整備により、閲覧席及び書庫狭隘

の緩和を図り、情報機能及び学習支援機能の強化を図る。

2. 附属図書館において、新聞、雑誌の収書方法を見直すとともに、学内研究成果物を収集し、貴重資料等を選定し、展示を行う。

3. 附属図書館において、利用者のための図書館情報リテラシー教育の実施プランに基づき、各種講習会を実施し、利用ガイドを作成、配布する。また、広報媒体の内容の見直しを行う。

4. 附属図書館において、地域連携室と協議し、本学周辺地域の公共図書館との連携の可能性を検討する。

5. 附属図書館において、AVライブラリーの個人用ブース機器を更新する。

上記の平成16年10月に行われた附属図書館利用アンケート調査は、この3月、予定通りその集計結果がまとまるに至りました。ここでは紙幅の都合で割愛せざるを得ませんが、極めて興味深い事項を色々含んでいます。これは本誌の10ページ以下に大切な要点が載っていますので、熟読して下さい。

最近の日経産業新聞とインフォプラント「C-NEWS」の共同調査によって次のようなことが明らかになっております。図書館に関する「ネット1000人調査」によると、31.3%が最近1年間に利用する頻度が「減った」と回答、「増えた」の19.6%を大きく上回った。図書館に出掛ける頻度が減った理由では「新刊書や読みたい本がそろっていない」という蔵書数の少なさを指摘する声が多かった。「座席数が少ない」「開館時間が短い」など、施設内の環境面への不満のほか、「小さな子供がうるさい」ことや「貸し出される本が汚い」といったマナーの悪さも図書館離れの要因となっている(佐々木聖、「ネット1000人調査」『日経産業新聞』2005年2月25日より)としています。世上ではその打開策として色々工夫がこらされ図書館の取り組みで活字離れ対策が効果を示しつつあるようです。

我が附属図書館は、これら公共の図書館と同列に考えにくい色々な面がありますが、こうした地域の図書館との連携を取りながら利用者の色々なニーズに対応できる多様で高品質な情報源としての図書館へと変身を遂げていかなければならないと考える次第であります。

## 図書館で情報検索——ペルシア語の場合

森 茂 男 (ペルシア語学)

まず図書館へ

ペルシア語を専攻語に選んだ君が一番気になることはイランってどんな国？ということだよ。もちろん数多くある専攻語のうちペルシア語を選んだのだからある程度のことは知っていると思う。でも、はっきりしたことは分からないよね。では、どうすればイランについて基礎知識を得られるだろうか。方法はふたつある。ひとつは授業で教えてもらう。もうひとつは自分で調べる。どちらも大切だ。前者だけだとちょっと受身的すぎるよね。後者だけだと大学に入った意味がないみたいな感じだ。じつは、大学の勉強は、授業で聞いたことを聞きっぱなしにしておくのではなくて、授業で聞いて興味を持ったことを自分で調べていく。こうして未知の世界を自分で切り開いていくところにその醍醐味があるんだ。

では、自分で調べる場合、どうすればよいか。これも方法は二つある。インターネットですばり「イラン」と入力する。たくさんのホームページが検索されるから、このなかからおもしろそうなホームページを読んでいくのもひとつの方法だ。もうひとつは図書館へ行くことだ。5階建てのこの建物は大阪外国語大学の知の宝庫、調べ方が分かればあらゆる知識が取り出せる魔法の玉手箱だ。まずは、ノートと筆記道具を持って図書館の玄関をくぐり、二階へあがろう。

百科事典から

二階に上がると閲覧室とカウンターがある。背の低い書棚も並んでいる。検索用のパソコンもずらりと並んでいる。この二階から君たちの知的探検をはじめよう。この二階に置かれている本は参考図書といって、辞典・事典・資料集のたぐいの本だ。どんな本があるか、とりあえず一巡して眺めてみよう。どこにどんな本がおいてあるかを知っていることはとても大切なんだ。一巡したら具体的に調べにかかろう。ところで、何を調べたいのだった？ それが分からないんだね。そう

いう時は、とりあえず百科事典にあたってみよう。百科事典は小さい図書館。いろいろな知識がつまっている本だ。

百科事典の書架に行くといろいろな百科事典があるだろう。『世界大百科事典』でもいいし『日本百科全書』でもいい。適当な事典を選んで「イラン」の項目を引いてみよう。かなりの分量があるだろう。とてもではないが一日では読みきれないよね。でも、よく見ると歴史や地理、文学、言語、政治経済などの項目に分かれている。このなかから君が興味を持っている項目を読めばいいんだ。そのとき、できればメモを取りながら読んでいこう。歴史であれば、ササン朝、サファヴィー朝、アケメネス朝といった単語と年代を書いておくだけでもいい。これでイランについての基礎知識は得られるはずだ。でも、ササン朝のことをもっと詳しく知ろうと思えばちょっと不満を感じるよね。そのときは「ササン朝」という項目を調べてみよう。アルダシール一世やシャープール一世といった王の名前やゾロアスター教とかマニ教という言葉が出てくるだろう。こうして芋づる式に次々と調べていくことをクロス・レファレンスというんだけど、これを使うと百科事典だけでレポートなど簡単に書ける。文字通りマイクロコスモスのなかの知的探検だ。

できればアメリカの百科事典“Encyclopædia Britannica”でも調べてみよう。ものすごく詳しい。心配は無用、知らない単語も多いだろうけれど、読みやすい英語で書かれている。根気があれば、読破も可能だ。英語でイランの項目を読めば英語もバッチシ、イランもバッチシ。一粒食べて二度おいしい、というわけ。二兎を追うもの...ということわざには耳を傾けない！

三階へあがろう

百科事典は知りたい情報がコンパクトに凝縮されているからとても便利だけれども、どこか無機質なところがあって、筆者の個性が見えてこない。やはり、図書館だったら、単行本を借りて読みたいよね。

そこで三階の開架書架に上がってみよう。ここには約8万冊の本が図書館分類法にしたがって整理されている。もちろん、開架だから自由に見ることができる。百科事典で歴史に興味を湧いたとしよう。それじゃ、この開架書架でイランの歴史書を探してみよう。ここには6,455冊の歴史関係の本が納められている。ここからイランの歴史書を探すのは大変だ。書架の端に分類のネームプレートが付いているから、「歴史」のところ、それも東洋史のところを探せばすぐに見つかるよ。

ところが、ここがっかりするかもしれないね。イランの歴史関係の本は20数冊しかないんだ。中国史の本と比べれば格段の差がある。めぼしい本がないや、と思ってそのまま引き下がる人もいるかもしれない。また、絶対読む本を見つけないと粘る人は足利惇氏『ペルシア帝国』やロマン・ギルシュマン『イランの古代文化』（岡崎敬他訳）などを読んでみようかな、と思う人もいるだろう。ところが、これらの本はイスラーム以前のイラン古代史の本だ。イスラーム時代の本を読みたい人はどんな本を読めばいいんだろう？一番よい方法は手当たり次第本を出してパラパラと眺めてみることだ。それにしてもイランの本は少ない。

### 「隠れイラン」の本は？

興味を湧いてきたかな？ここでちょっと考えてみよう。百科事典でイランは7世紀半ば以降イスラームの国になったと書いてあったらう。イスラーム（これも百科事典で確認しておこう）は北アフリカから西アジア・南アジアを経て東南アジアまでを含む巨大な文化圏をつくっている。その中心がアラブであり、イランなんだ。そうするとイスラームに関する本のなかにイランのことも書かれているかもしれないだろう。そこでとなりの書棚を見よう。イスラーム関係の本が並んでいるよね。イランよりはかなり多い。そのなかの一冊、たとえば、陳舜臣[ほか]『コーランの世界：イラン・イラク』を見てみよう。写真も多くて読みやすそうだろう。ちょっと教科書みただけけれども板垣雄三、佐藤次高(編)『概説イスラーム史』というのもある。こういった本はイスラーム文化圏のなかでのイランの位置づけを知るうえで役に立つよ。二冊とも借りていこう。

もっと知りたい！

百科事典で基本的なことは知ったし、歴史の概略も頭に入った。前期の講義でイランの歴史もしっかり聞いている。すると、不思議なものでもっと知りたい、もっと知りたいという欲望が果てしなく湧いてくるもんだ。頭の奥からか心の底からは知らないけれど、この欲望は抑えることができない。何かと似ているね。

このとどまることを知らない好奇心をコントロールするには二つの方法がある。ひとつは、はじめに読んだ本の末尾に参考文献の一覧が載っているはずだ。このなかから面白そうだと思う本を選び、検索をすること。もうひとつは先生に推薦する本を訊いて、それを検索すること。

どちらにしても次に読む本が決まったら、また図書館へ行こう。今度読みたい本は『ペルシアと唐』だとしよう。まだ決まっていなくてもいい。迷っていても、とりあえずレッツ・ゴー。行き先は三階ではなくて二階閲覧室の検索コーナーだ。

### パソコンで検索

パソコンで検索って簡単にいうけれど、パソコン画面を見ているとやたらと分けのわからない項目が多くて、なんだか難しそうだね。そのときは「簡易検索」をマウスで押してみよう。ここで空白の場所に「ペルシアと唐」と入力してみよう。すると、「検索結果一覧」が「検索結果は1件です」と表示される。下に具体的な書名が出ているからそこを押すと「所蔵情報」の画面が現れる。「所在」のところを見ると、「三階開架一般図書」というのがあるだろう。「利用状況」を見ると「保管中」とあるよね。これは誰も借り出していないということだ。ここまで確認したら、請求番号をメモにとって三階へ行こう。目指す本をゲットして二階閲覧カウンターで借り出し、手続きをして終わりだ。

もし貸し出し中だったら、「予約」をしよう。書名と請求番号をメモしてカウンターに行って予約手続きをする。そうすると長くても二週間以内に借り出せるはずだ。パソコンの上からも予約はできるから詳しくは司書の人に訊いてね。

このパソコンを使った図書検索システムをLINUS/NC OPACというが、使い慣れるととても便利だ。もし、パソコンを自分で持っていたら「お気に入り」のなかに追加しておこう。これでたっぷり遊べるよ。ペルシア語専攻の場合は共同研究

室にパソコンが何台か設置してあって自由に使えるから、そこからアクセスしてもいい。

遊び方を紹介しよう。まず検索画面を出そう。そこでローマ字で“Persian History”と入力してみる。すると135件が検索されるはずだ。日本語の本もあれば英語の本、ペルシア語の本、ドイツ語の本といろいろな本が出てきたらう。なかには歴史と関係のない本もある。たとえば、No.47では“An introduction to Persian literature / by Reuben Levy”という本が検索されている。[書誌情報]を押して[件名標目]を見てごらん。そこには[件名標目]LCSH:Persian literature - History and criticism

と出ている。この“Persian”と“History”が引っかかってきたんだ。もう一度検索結果一覧の画面に戻ってみよう。インターネットの「戻る」矢印を押せば戻れる。すると、「キーワード」というのが出ているだろう。つまり、この135件は書名ではなく“Persian”と“History”が[書誌情報]に登録されている本の書名なんだ。

純粋に「ペルシアの歴史 (Persian History)」を含む書名を検索したいときはキーワードの水色の下向きの不等号を押すと「書名」が出てくるから、それを選択して、もう一度検索欄に“Persian History”と入力しよう。それから[絞り込み検索]を押してみる。画面は[検索結果一覧]になって32件の書名に絞り込まれたことが分かる。これだったら全部のタイトルを見ることもできるよね。

次に検索欄に“Iran history”と入れてみよう。“Iran”と“history”を[書誌情報]に含む書名が43件検索できる。ここで書名で絞り込み検索を試みよう。“China”と入力してごらん。

Sino-Iranica : Chinese contributions to the history of civilization in ancient Iran : with special reference to the history of cultivated plants and products / by Berthold Laufer

という本が検索できたらう。これはシルクロードを通じてイランから中国に入ってきた植物などについて書かれた有名な本なんだ。

こういう風にいろいろ試してみると思いがけない本に出会うことができる。これで一日は遊べると思うよ。

## 困ったこと

- (1) 読みたい本が教員の個人研究室にあるところが、厄介なこともある。検索して読みた

い本が開架書架や書庫に保管されているときは問題ないが、教員の個人研究室に保管されている場合だ。たとえば、“Iran Grammar”で検索をかけてみよう。15件引っかかるはずだ。かりに、No.1のZazaki : Grammatik und Versuch einer Dialektologie / von Ludwig Paul を読みたいと思って、書誌情報を見ると[所在]は「森茂男研究室」となっている。その教員に研究室へ直接出向いて頼まなければならないのか、と思っただけでうんざりするだろう。「どうして君にこの本が必要な？」というような顔をされたりすると嫌なものね。そのときはカウンターの司書の人に書名とか研究室名などの必要事項を告げて閲覧依頼をしてもらおう。よほどのことがない限り断られないし、頭を下げる必要もない。

## (2) 外大の図書館に本がない

一番嫌なのはこれ。検索すると「該当する資料は所蔵していません。」という結果に終わることがよくある。専門的な本になるほどその頻度は高くなる。たとえば、イラン語方言学の古典的名著に“Indo-Iranian Frontier Languages”という本があるが、これを検索してみよう。残念だが「該当する資料は所蔵していません。」と出てくる。でも、ここであきらめてはいけない。下に[Webcatで検索]というボタンがあるだろう。ここを押すと日本中の大学図書館の所蔵状況が分かるしくみになっている。今の例でチェックすると9つのデータが検索できる。さらにNo.2のデータを押すと詳しい情報が出てきて8つの大学が所蔵していることと、それぞれの大学での分類番号が分かる。これをメモに控えて閲覧室のカウンターに行こう。手続きをすれば希望の大学から取り寄せてもらえる。ただし、往復の送料は自己負担だ。つまり、全国の大学の図書がパソコンひとつで利用できるようになるんだ。ペルシア語のように研究書も研究者も少ない地域言語の文化や言語を研究する場合、このシステムはとてありがたい。まだ必要にはならないだろうけれども、このシステムがあることはしっかり覚えておいて欲しい。

## とっておきの情報

- (1) ペルシア語文字を使って入力する。  
これは図書館のホームページには直接書かれていないけれども、君の使っているパソコンがWindowsの場合、ペルシア語の文献は直接ペルシ

ア文字を使って検索できるんだ。たとえば, تریخ ایران (イランの歴史) と入力すると, それを情報に含んでいるペルシア語の本がペルシア語文字のまま検索される。49件が引っかかるはずだ。あとは, 辞書を片手に書名の意味を判読しよう。それから, 話は前後したが, ペルシア語の入力の仕方は授業でも教えるし, 先輩にも聞いてごらん。知っている学生はたくさんいるし, みんな親切に, 得意になって教えてくれるよ。

## (2) Encyclopædia Iranica のこと

『イラン百科事典』のことだけでも, 現在11巻目まで出ている。第1巻第1分冊が出てから25年以上経っているけれども, 何巻まで出るのか, 何年に完成するのも分からない。しかし, イランのことなら何でも出ている事典だ。たとえば, 「馬」を意味する "asb" の項目を引くと何ページにもわたって馬の完璧な説明があり, 詳しい文献案内が付いている。これで「馬」の知識をひと通り得たら, 次は何を読めばよいのかが分かるようになっていて。"China" の項目では中国語に入ったペルシア語の借用語まで分かるよ。ただ, 残念なのはこの本は図書館には置かれていない。所在は個人研究室だ。でも, 学生に使いやすいように配置されているから, いつでも自由に利用してほしい。

最後に

大学生活はなんといっても, どれだけ勉強した

か, が一番重要だ。それには授業に出席をただけ, という消極的な態度ではだめだ。自分からどれだけ積極的な勉強をしたかが大切だ。この積極的な学習は図書館をどれだけ有効に利用したかにかかっている。図書館は試験対策用の自習室でも誰も読まない本の倉庫でもない。常に情報を発信し, 受信し, 配信している一大情報センターなのだ。知的アンテナを鋭くし, 好奇心に貪欲となって, 毎日でも図書館に通って欲しい。きっと, 充実した学生生活が送れると思う。

最後の最後

インターネットでのネット・サーフィンの楽しみ方をひとつ教えよう。

外大付属図書館のホームページから「リンク集」を押す。いろいろなリンク先がでてくるが, とりあえず「国立国会図書館関西館」に行こう。そこから「アジア情報室」へ行き, 「インターネット情報資源」へ進む。すると国別の一覧表が出てくるから「イラン」を押す。後はイラン国内外のインターネット世界が広がっている。欧米に亡命した反体制派イラン人たちのホームページも平等に載っている。ペルシア語だけのホームページもあるし, 英語で書かれているホームページもある。後は自由に楽しんでください。ちなみに, アドレスは

[http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/asia/link/middleeast/link\\_irn.html#10](http://www.ndl.go.jp/jp/service/kansai/asia/link/middleeast/link_irn.html#10)

です。

---

## 今様・知的生産の技術——検索のすすめ

古谷 大輔 (スウェーデン史)

### 1. 『知的生産の技術』

今も昔もかわらず学生諸君に一読を勧めたい書の一つに, 梅棹忠夫氏による『知的生産の技術』(岩波新書)がある。この書の初版は1969年のことであるから, 今のようにインターネットが普及して膨大な情報が国境線を越えて氾濫する前に書かれたものではある。しかしこの書の骨子は今にあってもなお決して埃にまみれたものとは言えず, 大学という「知的生産」の現場に生きる

者は折に触れ顧みるべき内容に溢れていると私は思う。とりわけ「わすれるためにかく」と題された節がある資料カードの整理法は, カードの媒体が紙からパソコン上のファイルに変わったとはいえ, 現在でも私の勉強スタイルの一つであることに変わりはない。

とはいえ, 今となってみればこの書にある一つの問題点にも気づいている。それは読書メモとしてのカードは「分類が目的ではない」から蓄積す

ることに躊躇してはならないと説明されつつも、その後には「整理と事務」という章が割かれ、目的の情報に至るために整理と分類に工夫することが説かれている点である。この書の書かれた時代にあつては、蓄積された情報に至る手段が人間の記憶に依拠せざるを得なかったため、資料の整理・分類法が重要だったことは理解できる。しかしながら、膨大な情報が日々世界中より集積している今日にあつては、情報の整理と分類を人間の記憶力に頼っていただけはどうにも太刀打ちできない。パソコンを長く使い続けた人ならば、膨大に蓄積されていくファイルやメールを整理しようとして作ったフォルダの名前さえ忘れてしまった経験を一度はお持ちだろう。本来効率よく情報を整理すべき手段としてある筈の整理・分類が足手まといになり、フォルダ名を検索するなどという矛盾が日常茶飯事となっているのである。

『知的生産の技術』で梅棹氏は、あらかじめ書物を整理・分類しそれを記憶することで暗闇のなかでも目的の書物を見出すことのできた本居宣長の事例を紹介しているが、残念ながら私は宣長のような抜群の記憶力を持ち合わせてはいない。

## 2. デジタル・データ時代における知的生産

情報処理をめぐる環境において『知的生産の技術』の書かれた時代と今日との最も大きな違いは、いわゆる IT 革命の進展に伴いあらゆる情報がデジタル・データ化された点にあると私は考えている。いまや文字はもとより、音、映像、画像といったあらゆる形式の情報は、すべてが「0 と 1」に還元されるデジタル・データとして同列に扱われる時代となった。そもそも国境線を越えたインターネットの世界を可能にした情報革命の革新は、電氣的に処理可能な情報の均質化に負うところが大きい。例えばロボット型検索サイトとして著名な Google が検索対象とするホームページ数は今や 80 億を超えたと言われるが、我々はその膨大な情報の「海」に彷徨う日常にある。この情報の「海」では、文書、音楽、絵画、映画といった情報の形態はすべて「0 と 1」に還元されている。それゆえに、我々は世界中のありとあらゆる情報を、その形態に関係なく即座に獲得できるようになっているのである。

このように情報の性質が根本的に変わってしまったということは、それを扱う方法も劇的な変化を遂げているということでもある。多様な情報形態が組み合わされるマルチメディアという情報伝達の形式が登場したことによって、情報公開

の在り方が変化したことについては、ここで多言を要すまい。私の学生生活においては、むしろ情報獲得の方法がこの十年ほどで劇的に変化した。例えば、自分が今取り組んでいる研究テーマについては、頭に浮かんだキーワードを上述したロボット型検索サイトを活用して、のべつ幕なし検索するようになった。そうして得られた資料や書物の情報は、国内外の書誌データベースを用いてやはり のべつ幕なし検索するようになった。国内の大学図書館や研究機関に所蔵されている文献情報は NACSIS webcat を、国外の文献情報は米国議会図書館やスウェーデン王立図書館といった各国の中央図書館の公開している書誌データベースを活用するようになった。こうした書誌情報は目的の文献を所蔵している各研究機関での分類番号を網羅しているので、この情報さえ得られれば後は図書館の相互貸借サービスを活用して必要な文献を得ることができる。また高度な文献管理ソフトウェアを用いると、世界中の主だった図書館や研究機関の公開している蔵書目録データベース (OPAC) と連動して著者名や書名などのキーワードに従って自動的に検索が行われ、当該テーマに関する文献リストが瞬時に作成される。最近では、論文や資料そのものをデジタル・フォーマットによって公開している機関もあり、そうした場合には自宅や大学に居ながらにして必要な資料そのものを得ることができるようになった。私は歴史学を専門としているが、かつては実際に現地を訪れて調査するほかなかった文書館史料でさえ、スウェーデンなどでは所収情報のデータベース化が進んでおり、その情報を辿っていけば日本に居ながらにして即座にマイクロ・フィルムなどの形で入手できるようになった。あとはそうして入手した文献を熟読し再びそこで得た情報の検索を繰り返すことで、自分の研究の精度をさらに高めることに努める日々である。

## 3. 網羅的検索のすすめ

ここで紹介した情報の質的变化に伴う新たな情報獲得法の根幹は、検索を多用するという点である。その対象は地域的範囲で言っても世界的に広がり、その形態も文書から図像・動画と多種多様である。こうした資料情報のデータベースが公開され、自宅や研究室に居ながらにして検索できるようになったことで、我々の学生生活はもはや情報の漏れが許されない地点まで達し、それに従って我々が処理せねばならない情報の量は膨大になっている。それでは、はたしてかつて梅棹

氏が『知的生産の技術』で主張していたように私が世界中から獲得した情報を整理・分類しているかという点、そのようなことは決してない。もとより私のような人間の記憶力は曖昧であり、それに頼るのは合理的な手段とは言えない。しかし、この十数年で私はパソコンという非常に有能な研究の「相棒」を得た。パソコンに蓄積された私の読書メモは世界に広がるネットワークに繋がっている。自分の記憶力に頼らなくてもその検索機能を活用するならば、パソコンの中に蓄積された情報と世界中のインターネット上に蓄積された情報から高速かつ高精度に必要な情報を釣り上げてくれる。いわば「0と1」に還元されたデータの「鍋」の中から、自分が「食べたい」ものを串刺しにして「おでん」や「串カツ」のように取り出してくれるようなものである。

情報のデジタル・データ化が高度に進展した今日にあって、情報データベースの「海」から自らが必要としている情報を釣り上げる検索術が新たな知的生産の技術としてかくも重要になったのは、ここ十数年における情報をめぐる環境が劇的に変化したためであるが、その一方で学究生活を送る自分自身の中で全く変わっていない部分もある。その一つは検索情報を通じて実際に資料を手にしたときの喜びである。かつては、足繁く図書館に通って書誌カードを一枚一枚めくったり、分厚い『学術雑誌総合目録』をめくったりして目的の文献情報に達した。インターネットの草創期にあってはTelenetを通じて様々な大学図書館の蔵書文献目録(OPAC)に個別にアクセスすることができたものの、webを通じた世界的なネットワークがいまだ確立されていなかったから一つ一つの書誌情報をその都度検索する必要があった。こうした苦労を経てようやく得られた資料との出会いは喜びも大きかった。確かに現在はネットワーク上に網羅されつつあるデジタル・データベースを通じて検索そのものは容易になった。しかしその分だけ貴重な情報と出会う機会が増えているのもあって、一歴史学徒たる自分にとっては以前にもまして知的に刺激される経験が増えている。これは、今も昔も変わらない知的生産の現場に生きる者に許される幸せな瞬間の一つであろう。

#### 4. 検索術の陶冶の場としての図書館

そしてもう一つ、私が本格的に知的生産に生きるようになってからの十数年来、私のなかで変わらずにあるのは図書館の存在である。私はスウ

エーデン史を研究しているが、私が研究を始めた頃も今もこの分野に関する文献や史料は、我が国の大学図書館や研究機関にはほとんど存在しない。しかしそれでも研究を続けることができた理由は、図書館の蔵書数そのものに幻滅せず、むしろ世界に開かれた情報アクセスの機関として図書館を認識して、それを利用してきたからである。私がこれまで辿った学究生活の時期は世界的にIT革命が進展した時期とほぼ同じだったから、その技術革新の恩恵を受けることで研究を続けることができたということもあろう。自らが属した大学図書館の蔵書文献目録はもとより、大学図書館が提供する内外の研究機関の文献検索情報や電子ジャーナル・サービスなどを活用して、私は国内外のスウェーデン史に関する文献や史料の情報を網羅的に収集してきた。そしてその過程では、幾度となく豊富な文献管理のノウハウを有する図書館の司書たちに助けられてきた。一般的に図書館はその所蔵する文献の数で善し悪しが判断されるのかも知れないが、私にとっての図書館とはまずなにより世界に向けての情報アクセスの扉であった。図書館での数えきれない情報検索の経験を積むことで、デジタル・データの時代に応じた検索術の基礎を私は学んだ。図書館で検索術のノウハウを手にした私は、やがて自らが研究している歴史学の分野に限らず、手軽にそして瞬時に他の様々な分野の知的情報を検索できるようになった。自分の専門以外の分野についても、自らの知的好奇心に応じて膨大な情報を得られるようになったから、その場を提供してくれる図書館は私の学究生活にとって必要なあらゆる「食材」を得ることのできる「ビュッフェ」のような存在となった。

デジタル・データの時代にあつて知的生産に携わる者は、情報の「海」から自らの知的好奇心に適う「食材」を釣り上げるために、検索術を磨かねばならない。しかしその技術はそれ自体としては決して万能ではない。確かに我々は記憶力の曖昧さに躊躇する暇があるならば、その瞬間も情報の「海」に漕ぎ出して検索に勤しむべきと私は思う。しかし検索を司る主体は、今も昔も自分自身であることを忘れてはならない。例え検索のための技術がいくら進化したとしても、目的の情報に至るために打ち込むキーワードの数々が適切でなければ、求める情報を釣り上げることはできない。つまり検索術を可能にする最終的な担保は、自分自身の教養と知的関心である。検索術はあくまでも知的生産のための補助的技術に過ぎない

なのであって、それを有効に活用するためには自らの知的関心を高める不断の努力が必要であることを忘れてはならない。そうした意味で図書館とは、検索術を有効活用するための自己陶冶の場でもある。

また現状での検索術には、言語による文字コードの不統一など技術上未解決の問題も残されている。この文字コードの問題は本質的には「0と1」とに還元されたデジタル・データの世界であっても、我々人間がその思うところを理解し表明するためには最終的に言語が必要となることに起因している。とりわけ漢字や仮名文字を多用する日本語と諸外国語を同時に処理する検索技術は使用文字の違いから技術的困難があるとされているが、本学の付属図書館では多言語資料検索システムの開発が試みられている。今日、人間の

あらゆる文化的業績が「0と1」へ還元されてしまうのだという物言いは、文化の深淵を無視するような無味乾燥で機械的な過程に聞こえるだろう。しかし実際には文化のデジタル・データの還元と再現の過程で、人間の文化的営為を支えてきた言語の本質を反省する機会にもなっているのである。この例が示すように、デジタル・データの時代の知的生産術としての検索術は、人間の文化的営為を取り巻く環境が劇的に変化している時代であって、その本質を意識させる技術でもある。

この文章のなかで紹介した情報検索のノウハウのほとんどは、本学の付属図書館（あるいはそのホームページ）で手に入るものばかりである。まずは図書館を訪れて、我々が生きる時代に応じた情報の接し方に触れてほしいと私は思う。

---

## 「伊地智文庫」に寄せて

杉村博文（中国語学）

伊地智善継先生が他界され、早くも四年が過ぎようとしている。中国語で俗に「人過ぎて名を残し、雁過ぎて声を残す」と言うが、伊地智先生は日本の中国語教育にずしりと重みのある名前を残して逝かれた。その重みは「外国語をやって、ちょっとだけやったとか、少しだけできるなどというのは無意味です」という伊地智先生の外国語学習哲学から来ている。先生の作られたものはテキストにしる辞書にしる、まったくけれんみがない。学習者におもねるところがない。昨今「楽しく学ぶ」類の「教材らしき」出版物が市場に横溢しているが、先生は「あんなもので中国語を教えるなどと、中国の人に対して失礼です」と、眉を顰められた。実際、日本の中国語教材の志の低さは、中国の教育関係者の深く軽蔑する所であることを我々は肝に銘じるべきであろう。

大学を出るまで、私は自分を恵まれた星の下に生まれた人間であると思ったことはなかった。しかし大学を出た後は折に触れてそう実感し、今は

つくづくそう思う。現代中国語を読み解くことに関し、おそらく今でも質量ともにこれ以上は望めないというほどの訓練を、私は伊地智先生から授かったのである。中国語を正確に読み日々の読書生活を充実させる。その支えがあってこそ学習は本物になる。そういう信念に貫かれた中国語教育であった。今、我々の教える学生に「最近どんな小説を読んだ」と聞けば、返ってくる答えの大半は「読めません。読んだことがありません」であろう。勿論、非は学生たちにあるのではない。しかし、それをどうにかしようという気力が果たして今の自分にあるかどうか。不肖の弟子と自らを罵る以外にない。

先生他界の翌2002年に、ご遺族のご好意により伊地智先生の蔵書が本学に寄贈され、本学の貴重な財産となった。先生が中国のどこに魅かれ、なぜあれほど中国語教育に熱意を燃やされたのか。その辺の消息を先生の蔵書は我々に伝えてくれるであろうか。

## 図書館利用アンケートの結果について

附属図書館事務長 三村 登

### ●集計結果—高い回答率—

昨年10月に実施した図書館利用アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。おかげさまで、3,034人から回答（回答率51.7%）を得ることができました。

(表1)

今回のアンケートは2年前のアンケートの補遺とすべきものとして、はじめて全構成員を対象に実施しました。回答率は2年前に比べると、非常勤講師以外の全ての階層で高くなっています。とりわけ、学部生から約60%、院生から約30%という高い回答率を得たことは、調査結果が正確に学生のニーズや意見を反映していると断言できるでしょう。

皆さんから寄せられた貴重な意見、要望、苦情などは、今後の図書館の運営とサービスの向上、施設・設備の改善のために役立てさせていただきます。本学の中期目標に掲げる「図書館の学習支援機能の強化」を図っていく決意です。調査結果とその詳細な分析については、本学の役員と教職員に報告いたしました。

学生の皆さんには、この紙面を借りて、意見や要望にお答えする形で、その概要をお知らせすることにしましょう。

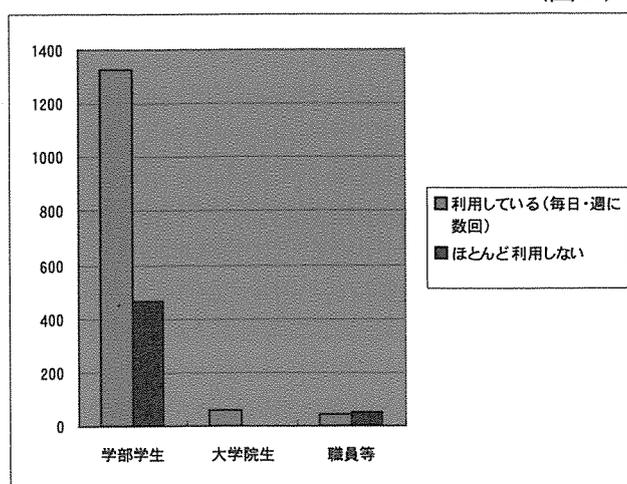
(AVライブラリーに関する調査結果は、「AV Journal」第35号をご覧ください。)

種別	所属	回答数	回答率
学部学生	昼間主コース	2181	59.7%
	夜間主コース	508	58.1%
	小計	2689	59.4%
大学院生	博士前期課程	75	34.1%
	博士後期課程	23	20.7%
	小計	98	29.6%
その他		7	12.5%
留学生日本語教育センター留学生		74	71.8%
所属不明(無回答)		7	
計①		2875	57.3%
職員等	専任教員	51	24.1%
	非常勤講師	53	10.3%
	事務系職員	47	40.2%
	その他(理事等)	7	100.0%
所属不明		1	
計②		159	18.6%
計①+②		3034	51.7%

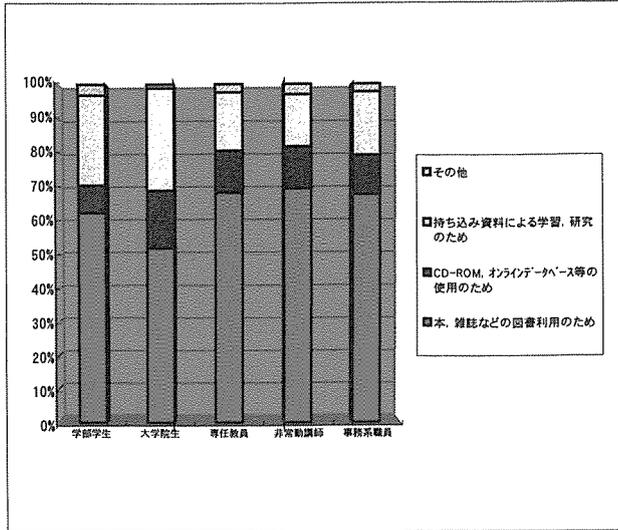
(図1)

### ●閲覧室(または書庫)の利用

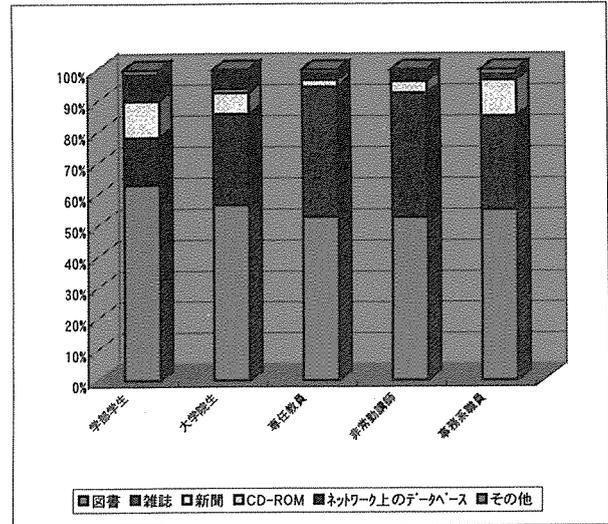
利用者の圧倒的多数は学生です。毎日、または週に数回利用している学生は、全学生の約半数を占めます。(図1参照) その利用目的は、自習室代わりに使われている場合もありますが、7~8割以上は図書及びCD等の資料の利用を目的としており、その点では図書館本来の機能が活かされています。(図2参照)



(図2)



(図3)

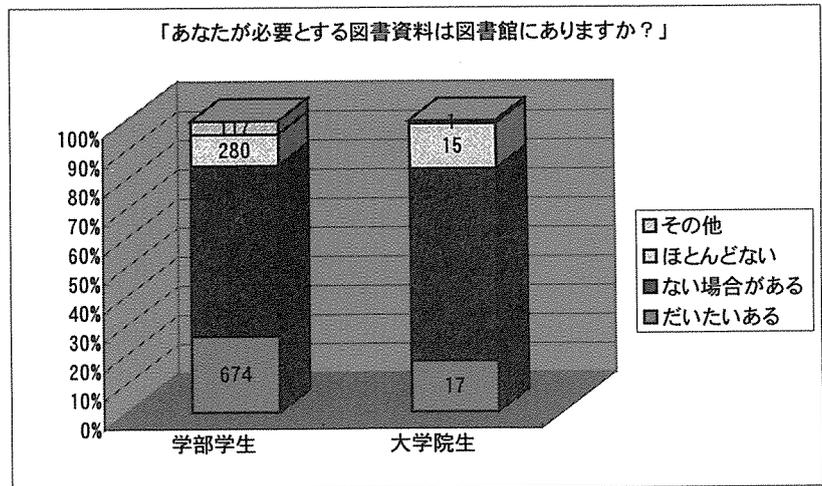


閲覧室で利用する資料は、圧倒的に図書が多く、ついで雑誌、新聞と続きます。CD-ROMやオンラインデータベースは院生の3割、職員等の2割が利用しています。数字自体は決して大きくありませんが、CD-ROMやオンラインデータベースが専門性の高いものが多いことを考えれば、研究目的にある程度は活用されていることが伺えます。(図3参照)

#### ●必要な資料がないという不満

しかし、「必要な図書資料はあるか?」という質問に対しては、学生の満足度は高くありません。必要なものが「だいたいある」と答えている学部学生は4分の1に過ぎず、「ない場合がある」と「ほとんどない」を合わせると約70%が図書館の資料に不満を感じています。その数字は大学院生になると80%以上になります。

(図4)



#### ●今後充実してほしい資料

では、学生はどのような資料を必要としているのでしょうか。「今後充実してほしい資料は何か?」という質問に対して、学部学生は一般教養図書の充実を求める者が最も多く、一般雑誌がそれに次ぎ、専門図書を求める声は3番目です。逆に、大学院生は①専門図書、②学術雑誌、③一般教養図書の順に充実を求めています。

4つまで複数回答可

(表2)

	一般教養図書	専門図書	参考図書	学術雑誌	一般雑誌	新聞	CD-ROM	視聴覚
学部学生	1553	1256	878	420	1301	234	127	209
大学院生	31	75	30	56	21	6	9	5
計	1584	1331	908	476	1322	240	136	214

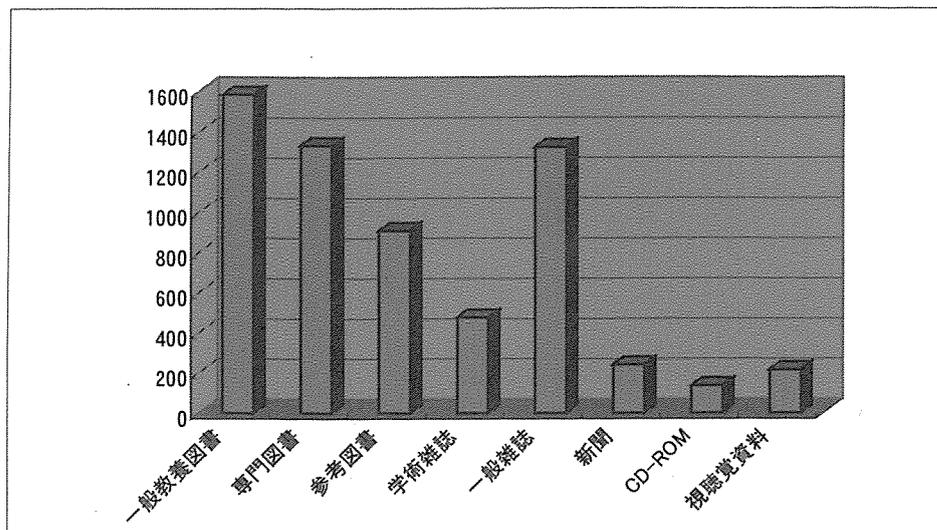
(図5)

では、学生たちが要望する「一般教養書」とは具体的に何を指しているのでしょうか。

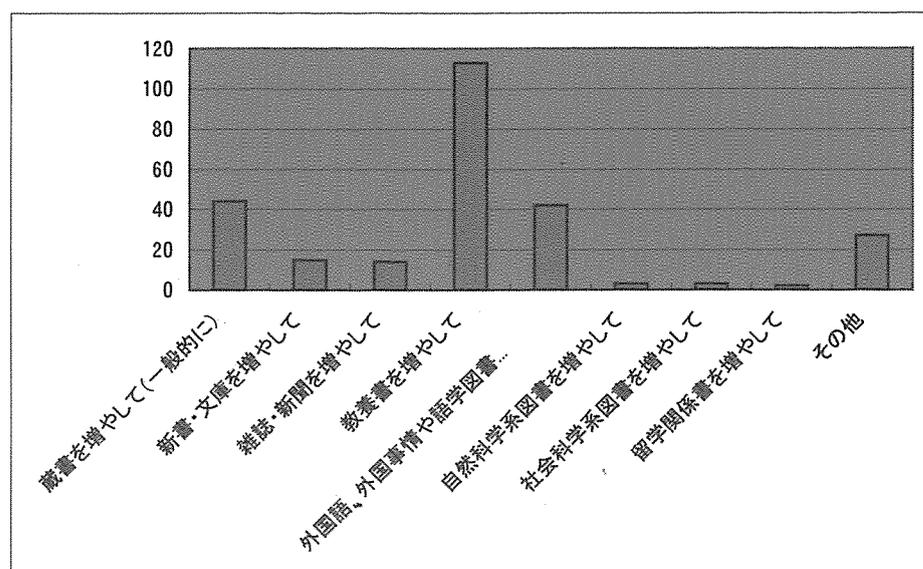
アンケートの自由記述欄には、この点に関して263件の意見や要望が寄せられています。(図6参照)

- ・「小説」を増やしてほしい。(こういう表現の要望が非常に多い)
- ・今話題になっている本を入れて欲しい。
- ・学術的ではない一般書を増やしてほしい。
- ・普通の本が少なすぎる。
- ・難しい本ばかり。一般教養的な本を入れて欲しい。等々

どうも、学部学生の要求する図書館像は気楽に読める図書も豊富に備えられているということになるのでしょうか。



(図6)



#### ●職員等への質問—蔵書関係で最も充実させなければならないものは?—

本学役員、専任教員(外国人教師等を含む)、非常勤講師、事務系職員に対して、蔵書関係で充実させなければならない諸課題について、重要度をランク付けしてもらいました。

「学生教育用基本的図書・雑誌の充実」、「専攻語で書かれた図書の充実」に対しては、8割以上が「最も重要」または「重要」という回答です。ついで、「学術雑誌の充実」が8割弱となっています。

つまり、教職員の方は、蔵書関係のあり方の観点から、優先順位としてまず学生用基本図書の充実、学術雑誌の充実を求めているのです。「一般教養書を充実させる」という質問項目がないので明確ではありませんが、学生たちが「小説」という言葉で表す一般的な教養書、ベストセラーなどの話題書、一般雑誌などの充実を求めていることは正反対の傾向を示しています。職員等が学術研究用の資料庫の方向への発展を願い、学生たち(特に学部学生)は実用的、教養的な読み物が豊富な市民図書館のような方向への発展を願っていると言えるでしょう。

相反する要望をどちらも満たすことは、キャパシティ面でも財政面でも困難です。単純にニーズに応えることでは解決しない問題であり、真の意味での学習支援、研究支援のためにどのような収書方針であるべきか、深く検討していく必要があります。

●自習室、ブラウジング・ルームの利用

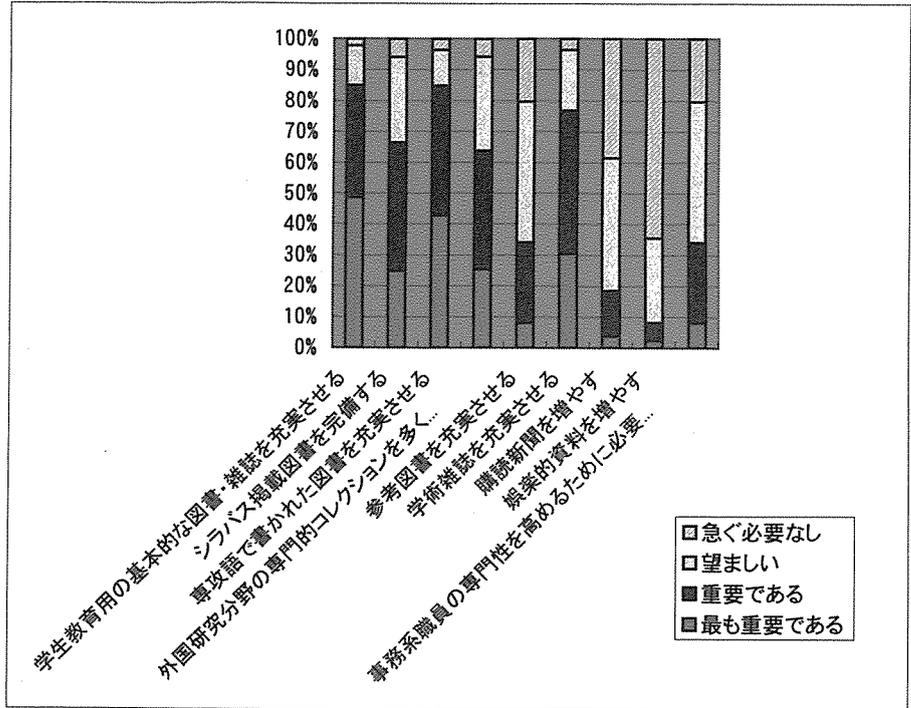
(図7)

自習室は、学生の半数は利用したことがあると答えています。利用経験のある学生のうち、約20%の学生が「ほとんど毎日利用」もしくは「週に数回利用」しています。(図8参照)

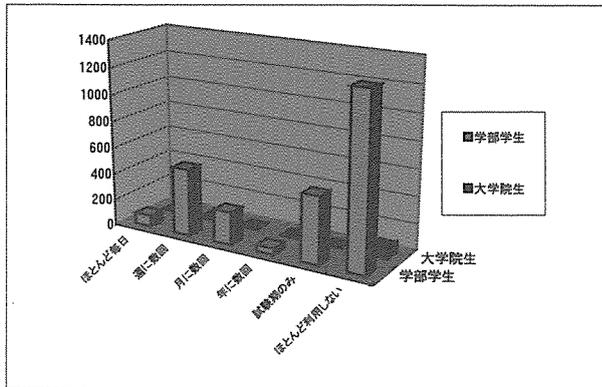
自由記述欄には、「試験期になると閲覧席が満席になるので、せめて自習室の増設を」という要望が数多く寄せられています。また、現在の自習室には「空調がないので、夏は暑くてたまらない」という苦情や「グループ学習室を設置してほしい」という要望もありました。

学内で静かに自習できる場所を確保してほしいという要望に応えるべく、図書館の5階に設置できないものかと現在検討中です。

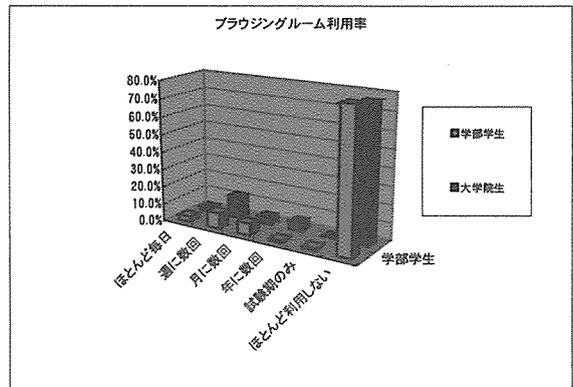
ブラウジング・ルームは、ほとんど利用しない学生が8割を占め、比較的利用している学生は1割程度です。(図9参照) 新聞、雑誌、パンフレット等気軽に読める資料を置いているのに利用率が低いのは、資料の種類が少ないことや「くつろげる場所」としての条件を満たしていないからでしょうか。(図18参照) これも現在改善方法を検討中です。



(図8)



(図9)



●開館日、開館時間

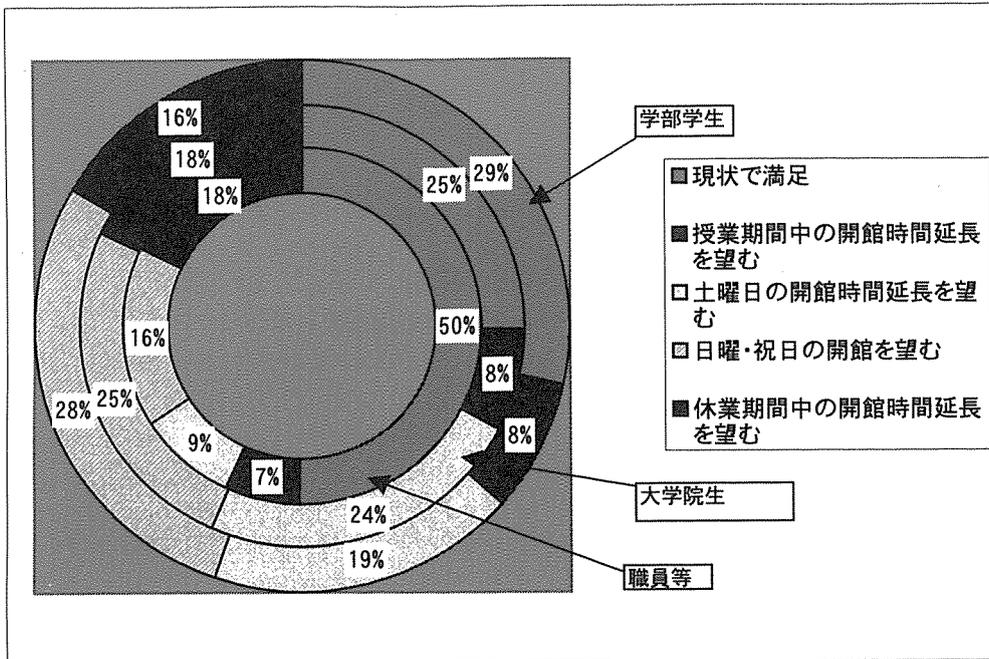
「現状で満足」という意見は、学生では4分の1強しかありません。(学部学生29%、大学院生25%) 職員等は50%が満足しており、学生の認識と大きな開きがあります。

日曜、祝日の開館を望む声は、「現状で満足」という学生とほぼ同率を占めています。授業期間中の開館時間延長は、学部学生の8%が要望していますが、コース別で見ると、夜間主コースの学生(15%)の方が昼間主コースの学生(5%)よりも2.5倍も多く要望しています。延長時間は「午後10時まで」という声が最も多くなっています。

休業期間中の開館時間延長は学部学生の16%、大学院生の18%が、土曜日の時間延長は学部学生の19%、大学院生の24%が希望しています。

学生の自由記述欄には、開館日・開館時間に関する意見、要望が75件寄せられています。これは蔵書に関する意見について多く、学生たちにとって切実な要望であることが分かります。これにも積極的に応えるために検討をはじめます。

(図10)

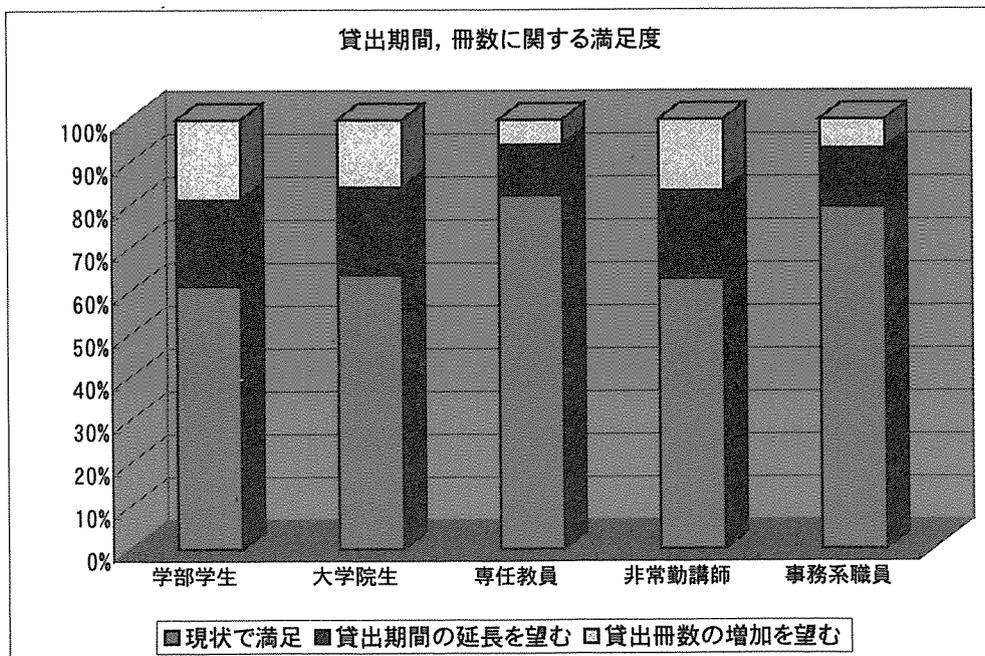


●貸出期間、貸出冊数

現状に満足しているのは、学部学生の61%、大学院生の64%です。貸出期間の延長を希望者は、学部学生、大学院生共に20%で、貸出冊数の増加を希望する者は、学部学生の19%、大学院生の16%となっています。

(図11)

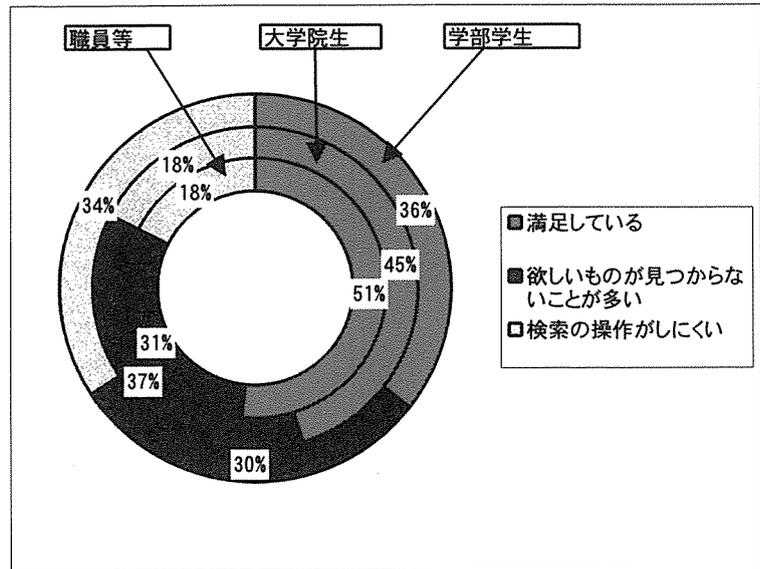
職員等では、非常勤講師の要望が学生の要望とほぼ同じ傾向を示しています。その他の教職員の満足度は80%前後で比較的高いと言えます。



●資料の検索方法

(図12)

本学のOPACで資料を探している人は、学部学生の47%、大学院生の55%、職員等の46%を占めます。学部学生では、書架を直接見に行って資料を探す方法を採用人が多い(42%)のが特徴的です。大学院生では、これが22%に減少しています。



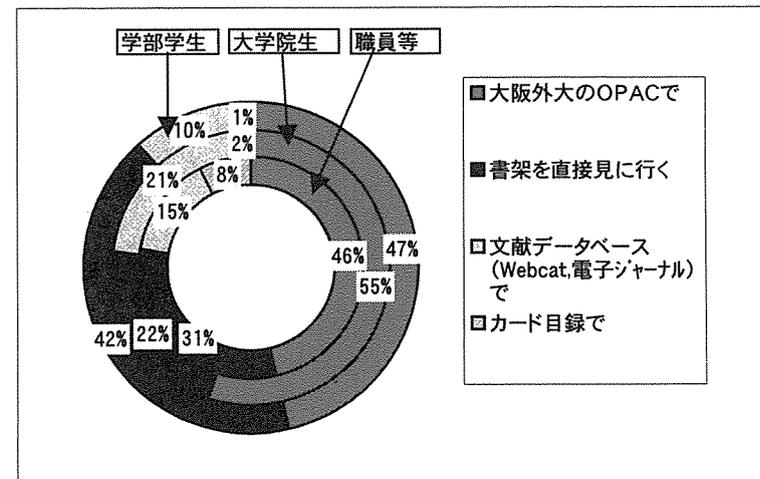
●OPACの検索結果

(図13)

OPACの「検索結果に満足」しているのは、学生の3割から4割に過ぎず、「検索したが見つからない」、「検索操作がしにくい」という不満がかなりあります。

階層別に見ると、学部学生の「検索の操作がしにくい」という不満(34%)が、大学院生や職員等(18%)のほとんど2倍もあることが分かります。

これは、院生や教職員は自室のパソコンから検索可能ですが、学部学生では図書館内の検索用パソコンを使って検索しているからだと思われます。(図13参照)



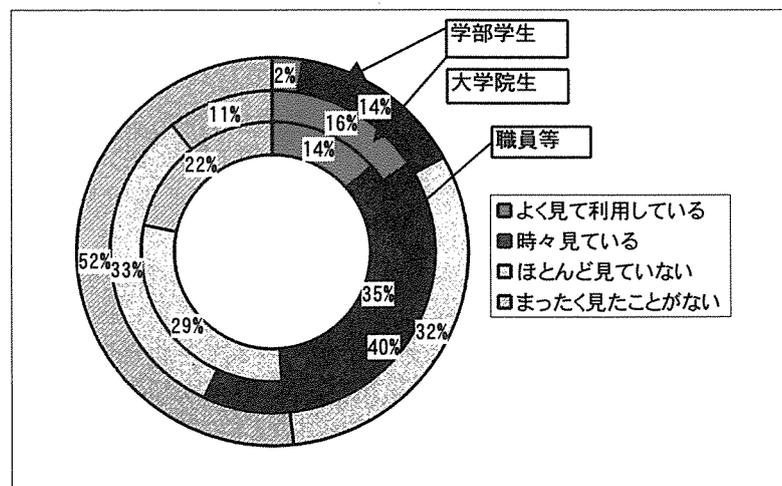
施設・設備面での不満な点を見ると、学生では「検索用パソコンが少ない、機器が古い、使いにくい」が「閲覧座席の不足」について多くなっていることから推察されます。(図18参照) この不満を解消するため、早急に検索用パソコンの更新、台数増加、説明の改善等を図ることを計画中です。

(図14)

●図書館のホームページ

学部学生では「よく見て利用している」または「時々見ている」を合わせても2割未満で、あまり見ているとは言えません。

大学院生と職員等では、半数くらいが「よく見ている」または「時々



学部学生の利用がこのように低いのは、図書館のホームページが発信している情報を活用すると勉強の効率が大きい上がることがまだ十分に知らされていないからでしょう。

図書館からの積極的なアピールと早期に情報リテラシーが身に付くような教育を行うことが必要となっています。

ホームページに関しては、「もっと分かりやすく、見やすく、常に最新の情報を」という要望や苦情が寄せられています。内容上も要望に沿って改善していく所存です。

### ●所蔵資料の利用以外の図書館サービス—知っているサービス—

学部学生のなかでよく知られているのは、「ホームページからの図書検索」、「館内コピー機」、「希望図書のリクエスト」、「貸出中の資料の予約」の4つのサービスです。図書館の基本的なサービスは知られていると言えるでしょう。

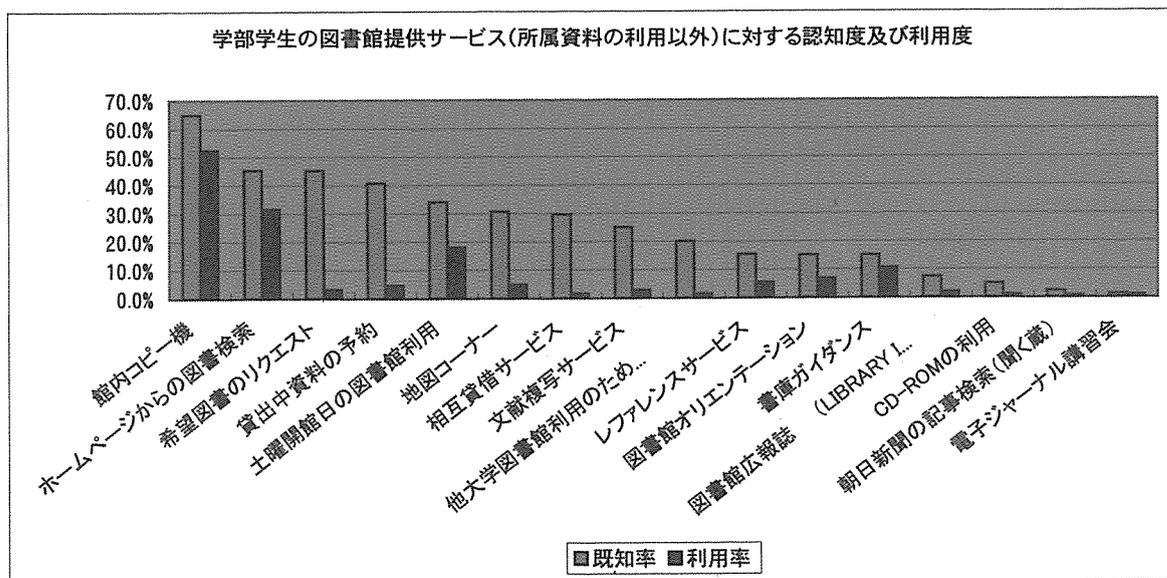
それでも「館内コピー機」以外は、いずれも50%に満たない認知度に過ぎません。「CD-ROMの利用」、「朝日新聞の記事検索」、「図書館広報誌」、「電子ジャーナル講習会」に至っては1~2%台の低さです。自由記述欄には、「このアンケートによって、こんなに多様なサービスを行っていることが分かった」という感想がありました。

つまり、学生の半数は、図書館とは図書の閲覧や貸出というサービスを行うところであり、それ以外のサービスについては無知あるいは無関心の状態であることが伺えます。

大学院生の場合は、さすがに学部学生に比べると、よく知られています。それでも「土曜開館日の利用」以外は80%には至っていません。特に10%から30%台の認知度のサービスは、研究活動にとって不可欠なものです。

まず図書館側からの積極的なPRが必要であり、さらには利用者のための情報リテラシー教育の本格的な実施が望まれます。

(図15)



### ●所蔵資料の利用以外の図書館サービス—利用したことのあるサービス—

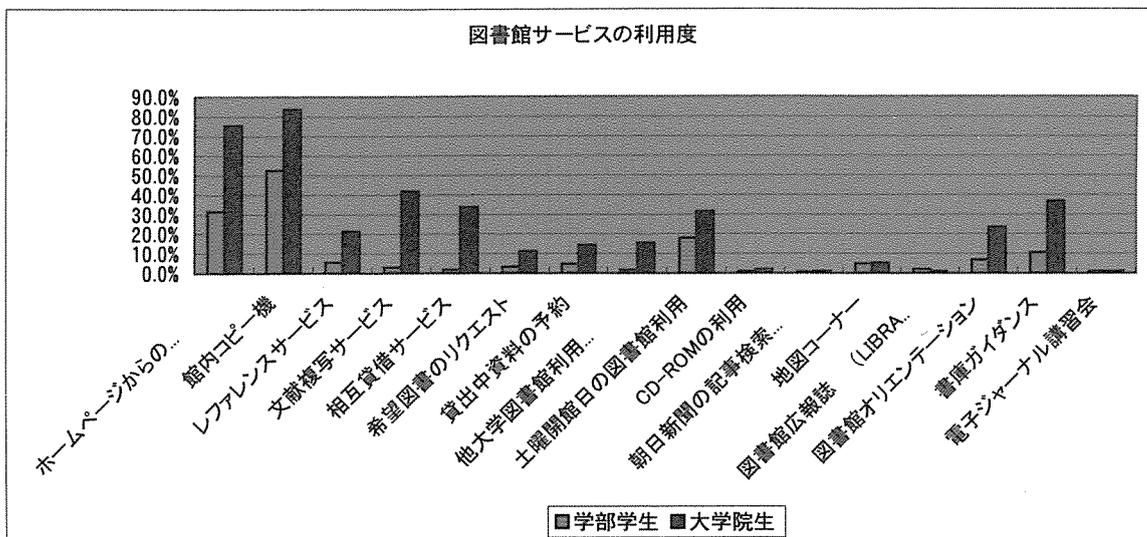
利用度は前項の傾向がそのまま数値ダウンして反映しています。しかし、認知度と利用度の間に大差があるサービスについては、個別に問題点を明らかにする必要があります。

例えば、相互貸借サービスは29.6%の学部学生が知っているが、利用したことのある学部学生は1.7% (大学院生33.7%) にすぎず、紹介状の発行に至っては、1.6% (大学院生15.3%) です。これは学部学生がそうしたサービスを受ける必要を感じていないということなのか、それとも手続きが億劫で本館に所蔵されて

いなければ利用を諦めているということなのか、地域の公共図書館との相互貸借が行われていないから利用しないのかというような点を分析していかねばなりません。

希望図書のリクエストでは、学部学生の認知度は45.9%、利用率は3.3%（大学院生11.2%）です。これも周知の不徹底のためなのか、制度に欠陥があるのか、学生の希望と収書方針にギャップがあるのかというようなことを検討していかねばなりません。

(図16)



●図書館の利用環境（施設、設備など）－施設、設備などの不満－

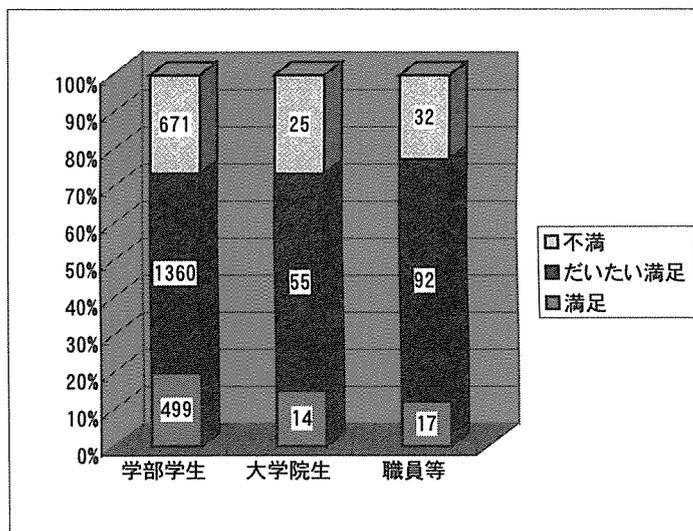
「不満」と回答した人たちが最も多く挙げるのは「閲覧座席の不足」です。学生の自由記述欄には、閲覧座席を増やしてほしいという要望が53件寄せられています。試験期間中は満席状態になるので、閲覧室の拡大が望めないなら、せめて「自習室を増やしてほしい」あるいは「グループ学習室がほしい」という意見、要望も多くありました。

2番目に多い不満は「検索用パソコンが少ない、機器が古い、使いにくい」で、3番目は「ソファなどくつろげる設備がない」という不満です。これらの不満は、OPACの検索結果やブラウジング・ルームの利用に関する質問においても現れています。

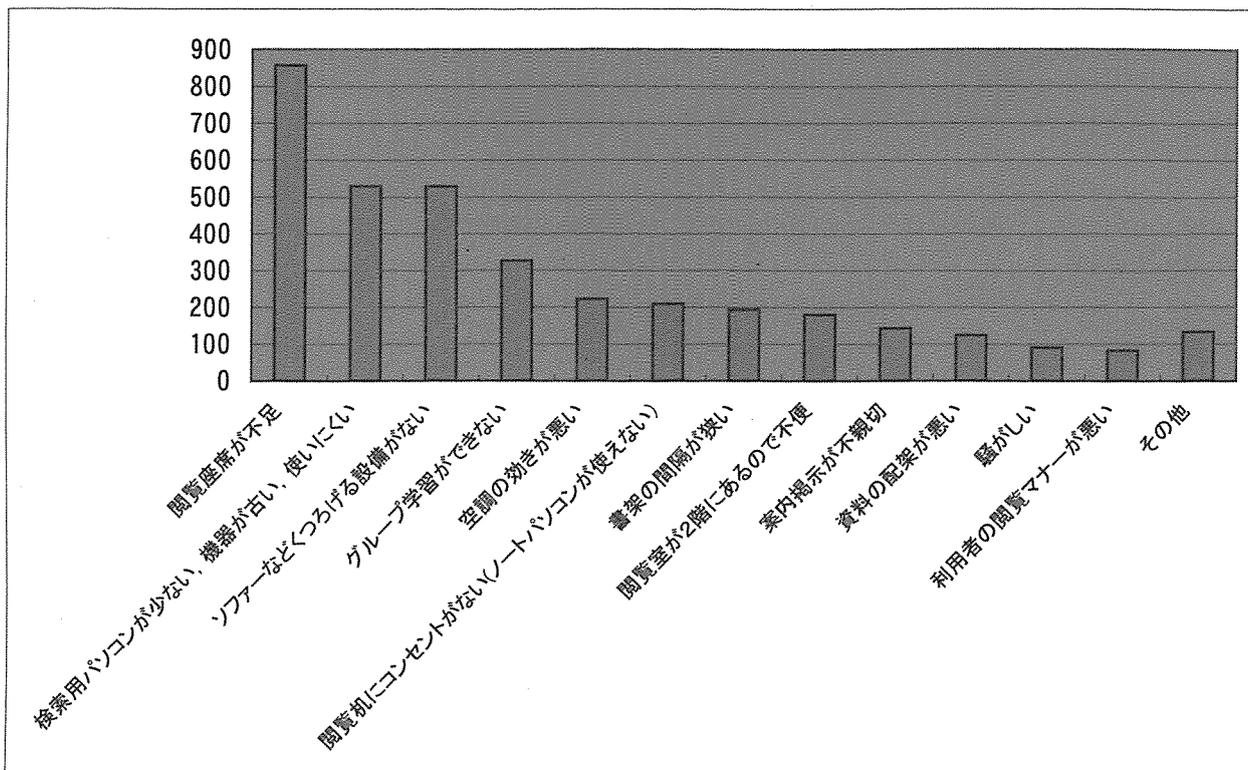
「その他」の不満としては、「照明が暗い」、「ほこりくさい」、「コピー機が少ない」、「トイレが入退館ゲートの外にあるので不便」、「ゴミ箱が少ない」、「入館するのに学生証が必要なのでめんどろ」などの記載がありました。

施設、設備については、どの階層でも7～8割が「満足」もしくは「だいたい満足」と答えています。

(図17)



(図18)

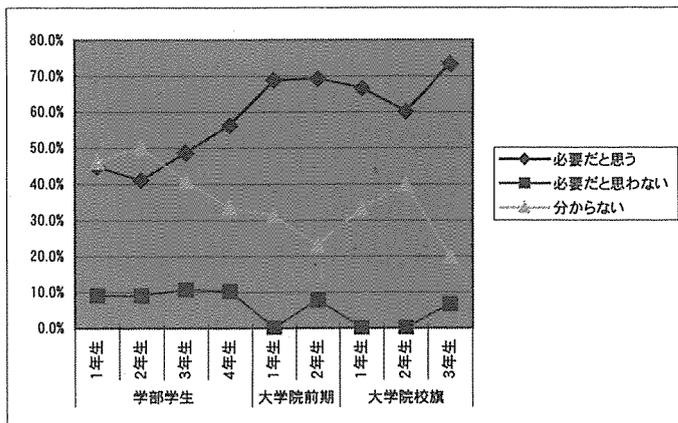


●利用者のための情報リテラシー教育の必要性

(図19)

学部学生では、47%が「必要」と答え、44%が「分からない」と答えています。大学院生では、70%が必要性を認め、「分からない」は25%です。

これを学年別で見ると、「必要」という回答数は学年が上がる毎に増えています。自らの学習や研究のために図書館の情報検索体験を重ねるほど、入学当初から体系だった情報リテラシーを身につけておけば、もっと効率よく学習や研究を進めることができたのと思っていることが伺われます。

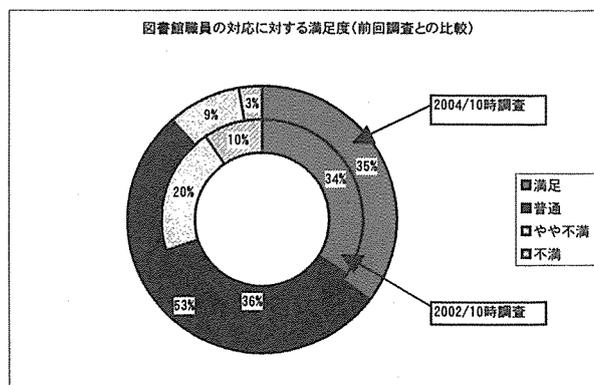


●図書館職員の対応

(図20)

88%の人たちが図書館職員の対応に「満足」しているか「普通」だと思っています。「やや不満」あるいは「不満」と思っている人たちは12%です。

2年前のアンケートでは、「やや不満」と「不満」で30%を占めていました。この数値がより小さくなり「満足」が増えるように、これからもサービス向上に努めていきます。



●図書館の市民開放，近隣公共図書館の利用

本学図書館が一般市民の利用にも供していることは，学生の約17%しか知られていないことが分かりました。図書館側のPR不足だと反省しています。

本学の近くにある公共図書館を「よく利用」または「ときどき利用」している学生は44%です。（学部学生25%，大学院生55%）

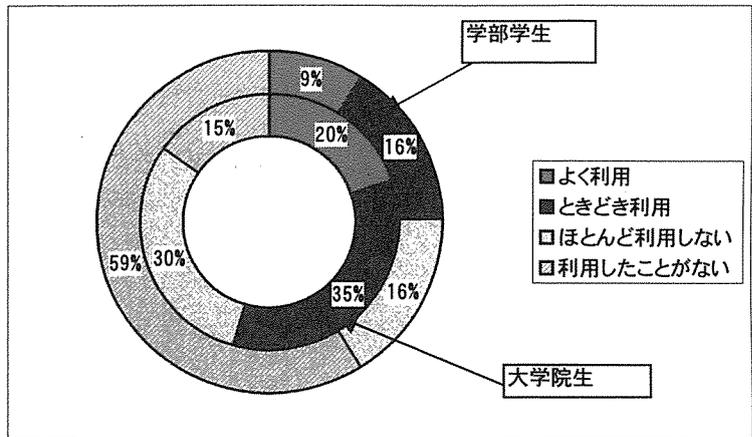
地域の公共図書館を利用する目的は，学部学生では「本学にない資料があるから」と「自宅の近くにあるから」が同数（43%）でした。

「その他」の理由として，「大学の図書館は日曜日に開いていないから」とか「大学図書館の開館時間が短いから」という記述が多くありました。

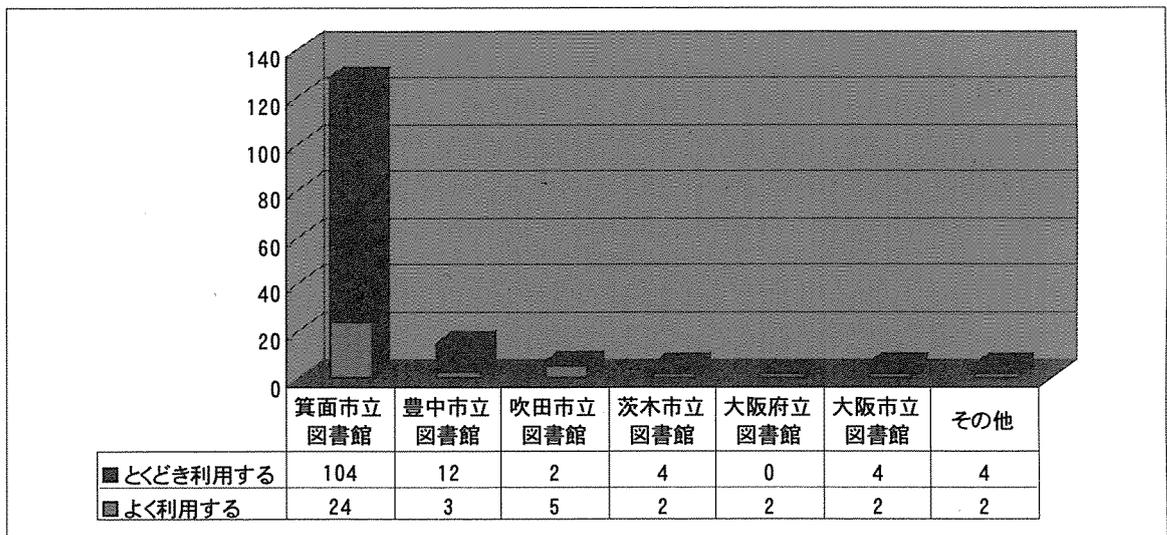
利用している図書館は，全体の75%が箕面市立図書館を挙げています。箕面市立図書館の利用者のうち，60%の人たちが東図書館を利用しています。

(図21)

本学図書館と地域の公共図書館が相互の特徴を生かし，お互いにメリットが出るように連携を進めていく必要があると思っています。



(図22)



## ＜寄贈図書を紹介＞

管理部門

図書館に本年度二つの大型寄贈がありましたので紹介します。ひとつは中国政府からの寄贈であり、もうひとつは本学モンゴル語科元講師宇野章氏蔵書の寄贈です。

### ＜中国政府（国家漢弁）から 1,000 冊寄贈＞

昨年中国駐大阪総領事館教育室から本学へ、井村国際課課長を介して1,000冊の図書寄贈の申し出があり、7月より受入準備に取り掛かった。これは本学が中国国家対外漢語教学領導小組弁公室（国家漢弁）の図書寄贈プロジェクトに指名されたことによる。まず、本学所蔵資料との重複を避け、外大にとって有用な図書を選ぶという大変面倒な作業を中国語専攻の古川、山崎両先生にお願いした。選ばれたものは、中国語学習書・工具書の大コレクションとなった。HSK（漢語水平考試）用の教材60冊をはじめ、北京大学出版社、北京語言大学出版社、語文出版社などから出版されている対外漢語教学用（外国人が中国語を学ぶ）図書・辞書666冊、その教材に附随するカセットテープやCD-ROM、VCDなどの視聴覚教材は600点を越えた。古川先生によれば、中国語学習書のコレクションとして国内屈指の質と量とのことだ。

図書館では閲覧室2階の中国語雑誌架の側に「中国政府寄贈図書」コーナーを設けて利用に供している。（視聴覚教材は総合研究棟のAVライブラリーに配置。）

### ＜モンゴル関係図書の寄贈＞

本学モンゴル語科元講師宇野章氏が平成15年に亡くなられ、遺族である六車多鶴子氏よりモンゴル関係蔵書約2,000冊の寄贈を申し出られた。モンゴル語専攻の橋本先生（現図書館長）が蔵書の実地調査を行い、橋本先生から「大阪外国語大学の研究・教育に裨益するところ大なるものがある」との所見を得た。図書館運営委員会で宇野氏蔵書の受入を正式決定し、10月から目録作業を開始し今春閲覧貸出が出来る運びとなった。

宇野章氏は1943年大阪外国語学校蒙古語部卒業、大阪外事専門学校助教授、大阪外国語大学講師の後、会社経営に転じられ1961年から1993年までは本学非常勤講師としてモンゴル語教育に尽力された。蔵書はモンゴル語学・文学・歴史などモンゴル関係全般にわたり、系統的な収集に目配りされている。寄贈図書の言語別冊数はウイグル式モンゴル文字によるモンゴル語325冊、キリル文字モンゴル語463冊、中国語453冊、英語その他約600冊となっており、内蒙古自治区からの出版物が多いためモンゴル語オールドス方言やブリヤート語などに関する図書、貴重な清朝時代の満蒙、西藏文献も含まれている。

---

「図書館ガイドス」、「書庫内資料検索ガイドス」

「電子ジャーナル講習会」に参加しよう

— 附属図書館を使いこなし、効率的な大学生活を送るために —

利用部門（附属図書館2階）

附属図書館では、学生の皆さんに図書館を活用していただくために、「図書館ガイドス」・「書庫内資料検索ガイドス」を行います。「図書館ガイドス」では、1・2年生の皆さんを対象にして基本的な図書館の利用方法や普段入ることのできない書庫を案内します。大阪外国語大学附属図書館はどのような資料を所

蔵しているのか、そしてその資料の検索の仕方・配置法、図書の借り方（自動貸出機の使い方）やレファレンス・サービスの利用についてなど、これらの基本的なことを知っていれば今後の学習を効率的に進めることができます。

3年生以上の皆さんには、「書庫内資料検索ガイダンス」を行います。今まで直接入ることができなかった書庫について詳しく説明し、書庫内で必要な資料を自分で探すことができるように案内します。書庫内資料検索ガイダンス参加者には書庫入庫許可証を発行します（注：入庫許可証がないと書庫に入れません）。また、附属図書館に所蔵していない資料や情報の探索法・入手法についてパソコンを使って説明します。レポート作成や論文作成には欠かせない内容になりますので必ず参加するようにしてください。

さらに、全学生、教員の方々を対象にして「電子ジャーナル講習会」を図書館で開催する予定です。冊子体ではなく、パソコン上で閲覧することができる電子ジャーナルについていろいろな検索法やその他便利な機能について説明します。

詳しい日程等は下記のほか、附属図書館内の掲示及び附属図書館ホームページ上でお知らせします。

#### ○図書館ガイダンス（対象：1・2年生）

- 日 時 1. 平成17年5月19日（木）13:10-14:40  
2. 平成17年5月26日（木）13:10-14:40

参加方法 申し込みの必要はありません。上記日程のうち、希望日時の10分前に図書館4階AVホールに来てください。

#### ○書庫内資料検索ガイダンス（対象：3年生以上）

- ・学部3・4年生の学生はゼミ単位での参加になります。ゼミの授業の中でガイダンスを行う予定です。
- ・大学院新入生

日 時 平成17年4月18日（月）～20日（水）各日14:00-14:40

参加方法 申し込みの必要はありません。上記日程のうち、希望日時の10分前に図書館2階カウンターに来てください。ガイダンス参加者に書庫入庫許可証を発行します。

#### ○電子ジャーナル講習会

日時未定

（平成17年6月頃予定。決まり次第、掲示及び附属図書館ホームページ上でお知らせします。）

---

## 附属図書館 Q&A－大学図書館を初めて利用する皆さんに役立つ質問集－

利用部門（附属図書館2階）

### <図書館の利用について>

- Q1 本日の開館時間を教えてください。  
附属図書館ホームページの開館カレンダーをご覧ください。また、館内にも開館カレンダーを掲示してありますので、そちらでも確認できます。
- Q2 土・日・祝日は開いていますか？  
授業期間中の土曜日は10時から16時まで開館しています。日・祝日は休館です。
- Q3 ライブラリーカード（学生証）を忘れても図書館を利用できますか？  
当日のみ利用可能な臨時入館証を渡しますので、図書館に入館することはできます。ただし、資料の貸出はできません。
- Q4 学外の者でも利用はできますか？  
簡単な手続きでどなたでも利用できます。

### <資料の利用について>

- Q 5 図書館にある資料の探し方が分かりません。  
附属図書館に所蔵している図書や雑誌を探す時は OPAC (Online Public Access Catalog) という蔵書検索システムを使います。館内には OPAC 専用のパソコンを 12 台設置しています。自宅からでも検索可能です。附属図書館ホームページから蔵書検索 OPAC の画面を開き検索してください。
- Q 6 書庫にある資料を利用したいのですが？  
書庫は 3 年生以上で書庫内検索資料ガイダンスを受けた方は入ることができます。そうでない方は利用したい資料の書名・請求記号等を図書請求書に記入してカウンターに提出してください。スタッフが取りに行きます。また、1・2 年生は 5 月 19・26 日に実施する図書館ガイダンスに参加していただければ、普段は入ることのできない書庫を案内します。
- Q 7 図書館にある辞書を授業で使いたいのですが借りられますか？  
辞書は参考図書ですので貸出禁止資料です。ただし、授業で使うために一時的な持ち出しはできますのでカウンターで手続きをしてください。
- Q 8 OPAC で検索して出てきた図書の請求記号が入ってないので図書を探せません。  
OPAC で検索して請求記号が入ってない図書は整理中です。整理され次第配架しますので、もう少しお待ちください。
- Q 9 OPAC で検索しても「所蔵していません」という表示が出たのですが。  
本学附属図書館が所蔵していない場合は、ILL (Inter Library Loan) というシステムで他大学に所蔵している図書を取り寄せて本学附属図書館内で閲覧することができます。また、雑誌記事や論文のコピーを取り寄せることができます。ただし、これにかかる費用は自己負担です。
- Q 10 他大学の図書館を利用したい時はどうすればいいですか？  
他大学の図書館を利用するには本学発行の紹介状が必要な場合があります。カウンターに申込書がありますので、訪問希望日の 3 日前までに申し込んでください。
- Q 11 図書の返却期限を過ぎるとどうなりますか？  
遅れた日数だけ罰則がつきその間図書が借りられなくなります。他の利用者にも迷惑がかかりますので、返却期限は厳守してください。

### <マナーについて>

- Q 12 図書館内で飲食はできますか？  
周りの人の迷惑となりますし、大切な資料を汚す恐れもありますので館内は飲食禁止です。
- Q 13 図書館内に喫煙できる場所がありますか？  
Q 12 と同じ理由で図書館棟内には喫煙スペースは設けられていません。大学で決められている喫煙スペースをご利用ください。
- Q 14 図書館内のパソコンで自分のレポートを作成したり、印刷したりすることはできますか？  
図書館内のパソコンは資料を探すこと（蔵書検索）以外の目的で使用することはできません。しかし、個人のノートパソコンを持ち込んでレポートなどを作成することは自由にできます。その場合は、電源のある専用閲覧机をお使いください。また、学生の皆さんが自由に使えるパソコンは総合研究棟 4 階のコンピュータ学習室に設置されています。

### <その他>

- Q 15 レファレンス・サービスとはどのようなサービスですか？  
レファレンス・サービスとは、利用者の皆さんが効率的に学習・調査・研究をするために必要な情報や資料を入手できるように援助する図書館の基本的なサービスの一つです。情報や資料を探す時に分からないことがあれば遠慮なくスタッフにお尋ねください。ただし、質問の内容によって回答ができない場合があります（授業の課題や宿題の回答、個人のプライバシーに関わる問題、医療・法律問題等）。
- Q 16 図書館のコピー機で図書館の資料以外のものをコピーしてもいいですか？  
また、コピーカードを図書館で購入することはできますか？

図書館のコピー機では、図書館の資料以外のものを複写することはできません。図書館のコピー機は図書館の所蔵資料の一部を著作権の範囲内で複写するために設置されていますので、それ以外の複写の場合は大学生協内のコピー機を使用してください。

また、コピーカードは図書館では販売していません。大学生協で購入してください。

Q17 附属図書館ホームページの学内サービスについて教えてください。

附属図書館ホームページでは、「貸出状況参照」・「貸出予約」・「ILL 依頼申込」のオンラインサービスを行っています。インターネットに接続されているパソコンであればどこからでもこのサービスを利用することができます。ただし、利用するには附属図書館2階カウンターで申し込みが必要です。

## AVライブラリーQ&A

利用部門（総合研究棟3階）

- Q1 資料を家で利用したいのですが、貸し出しはできますか？  
AVライブラリー内の資料はすべてライブラリー内での利用となります。貸し出しは一切行っておりません。
- Q2 資料を複写することはできますか？  
著作権法により違反となりますので、資料の複写は一切行っておりません。
- Q3 自分の資料を持ち込んで利用することはできますか？  
カセットテープ、CD、MD、VHS、DVD、VCDを持ち込んで視聴できます。また、海外で購入したVHSを視聴することもできます。ただし、パソコンで利用することを前提に製作されたCD-ROMの映像・音声ファイルおよび海外用のDVD（リージョンコードALLまたは2以外のもの。）は利用できません。なお、持ち込み資料の破損・損傷等の責任は一切負いかねますので、ご了承ください。
- Q4 食事の時間がもったいないので、資料を利用しながら飲食はできますか？  
周りの人の迷惑となりますし、機器の保守とライブラリー内の美化のためにも室内での飲食および喫煙は禁止されています。
- Q5 利用時間や資料の予約はできますか？  
利用時間の予約は一切行っておりません。なお、利用したい資料を他の人が利用している場合には、次に利用したい旨をお申し出ください。ただし、利用終了時にお申し出いただいた本人が不在の場合は次の希望者にお渡しすることがあります。
- Q6 グループで利用したいのですが、可能ですか？  
映像ブースは1グループ最大5人まで利用することができます。音声ブース（カセットテープ、CD、MD）は1人での利用しかできません。
- Q7 学生証を忘れたのですが、利用できますか？  
利用できます。名前の確認できるもの（クレジットカードを除く）を提出してください。
- Q8 映画の字幕を英語（他の言語）に変えることはできますか？  
DVDでは字幕言語を変更することができるものもありますが、すべての作品で変更できるわけではありません。DVDのパッケージで確認してください。
- Q9 利用時間、利用本数に制限はありますか？  
原則としてありません。ただし、少しでも多くの人が利用できるように混雑時には連続して利用することを断りすることがあります。また、1回の利用につき資料は1本でお願いします。

附属図書館・AVライブラリーについて知りたいことがある時には、附属図書館ホームページ (<http://www.lib.osaka-gaidai.ac.jp>) をご覧ください。また冊子体の『附属図書館利用案内』、『学生案内』（附属図書館のページ）もあわせてご覧ください。

## 平成16年貸出ベスト30

利用部門 (附属図書館2階)

	貸出回数
1. 日本語のシンタクスと意味 (第1巻~3巻) / 寺村秀夫著 [815.9/9]	32回
2. ノルウェイの森 (上・下) / 村上春樹著 [913.6/R]	25回
3. 罪と罰 (上~下) / ドストエフスキー作;江川卓訳 [983/886]	23回
4. The Shahnama of Firdausi (v.1-9) / done into English by Arthur George Warner and Edmond Warner [330PE/11]	21回
5. 収容所群島:1918-1956:文学的考察 (1-6) / ソルジェニーツィン著;木村浩訳 [983/638]	20回
6. 認知言語学の基礎 / 河上誓作編著 [801/1457]	20回
7. 日本語動詞述語文の研究 / 森山卓郎著 [815.5/11]	18回
8. ネパール 2002-2003年版 (地球の歩き方) [290.8/R/28]	18回
9. 生成文法の基礎 / 中村捷、金子義明、菊池朗著 [801.5/427]	17回
10. 生成文法がわかる本 / 町田健著 [801.5/775]	17回
11. 日本語動詞のアスペクト / 金田一春彦編 [815/200]	16回
12. 文法と語形成 / 影山太郎著 [810.8/30/2-4]	16回
13. 京都 (ブルーガイドニッポン) [291/R/27]	16回
14. 海辺のカフカ (上・下) / 村上春樹著 [913.6/1183]	16回
15. Foundation of Pakistan (1-3) / Edited by Syed Sharifuddin Pizada [225/514]	15回
16. シェイクスピア全集 (1-7) / 小田島雄志訳 [932/361]	15回
17. 語彙論的統語論 / 仁田義雄著 [815/250]	15回
18. 認知意味論/ ジョージ・レイコフ著;池上嘉彦、河上誓作他訳 [801.45/132]	15回
19. 生成日本語学入門 / 長谷川信子著 [815/378]	15回
20. モダリティ / 森山卓郎、仁田義雄、工藤浩著 [815/391/3]	15回
21. 事象構造 / 西村義樹編 [801/1584/1]	15回
22. ノルウェイの森 (上・下) / 村上春樹著 [913.6/R]	14回
23. モモ / ミヒャエル・エンデ作;大島かおり訳 [943.7/6]	14回
24. 台湾の政治:民主改革と経済発展 / 田弘茂著;中川昌郎訳 [312.224/20]	14回
25. 大航海時代における異文化理解と他者認識/ 染田秀藤著 [209.5/44]	14回
26. 社会のなかの言語 / スザーン・ロメイン著;土田茂、高橋留美訳 [801.03/259]	14回
27. 大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方 / 吉田健正著 [816/123]	14回
28. 時・否定と取り立て / 金水敏、工藤真由美、沼田善子著 [815/391/2]	14回
29. 体は全部知っている / 吉本ばなな著 [913.6/975]	14回
30. 認知言語学の発展 / 坂原茂編 [801/1542]	14回

大阪外国語大学附属図書館報《Library Information》第16号

2005年3月25日発行

発行 大阪外国語大学図書館運営委員会

〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1  
電話 072-730-5111 (代表)